



昭和十六年
五月

母のたのしみ

母のたのしみは、我子の世話をすることです。可愛がるといつて、撫でたり、さすつたりしてゐるだけなら、他人でもする子ども好きに過ぎません。親といふなかでも、父の場合は、大抵そんなところでは、それに對して、母の場合は、自分から我子のための面倒を、あれこれと手がけることにあります。面倒とは、よそから見ると話で、その面倒が何よりたのしいのです。

お子さんが幼稚園へ入園されてから、その面倒、すなはち母のたのしみが多く

なりましたでせう。朝々の仕度く。着物のことゝいひ、お辨當のことゝいひ、幼稚園へ出すことは、いろ／＼と手もかけられることです。うるさいから、幼稚園へでも追つばらつて置けといふのではありません、それどころか、よく遊べるように、いゝ榮養のとれるようにと、母の手は却つて多くかゝつても來ませう。

幼稚園へ入れてから、もう一とつきたちました。幼稚園になれて來たのは、お子さん許りでなく、お母さんも、幼児の母として、だいぶ慣れて來られた譯です。そして、日増しに、いゝお母さんとしてのたのしみが多くなつて來たでせう。

× × ×

幼稚園から

○もう此頃では、お子さん方も幼稚園になれて、楽しく遊んでゐられます。幼稚園は、いつでも楽しく遊んでゐるところですが、初めの間は、殊に遊び第一といつていゝ位にしてゐます。ですから、お歸りになつて、けふ何をしたのとお尋ねになつても、お子さんは、たゞ遊んだだけですから、何をしたとも答へられないでせう。けふは何を習つて來たのかなどと訊問されたら、習つて何？とびつくりされる位でせう。

○だん／＼唱歌や遊戯も初まり、自然あれこれと覺えるといふことも始まりますが、それは、習ふといふよりも、その時々、一ぱいの樂しきで我れを忘れてしてゐることですから、稽古ごとのやうに、うちへまで持つて歸つて、おさらひしたりするものではありません。興のつゞきで自分でする時の外、餘り尋ねたり、させたりしないで下さい。